

October 23, 1978
**Record of Meeting between Prime Minister Fukuda
and Vice Premier Deng (First Meeting)**

Citation:

"Record of Meeting between Prime Minister Fukuda and Vice Premier Deng (First Meeting)", October 23, 1978, Wilson Center Digital Archive, Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan, 01-935-1, 001-015. Contributed by Robert Hoppens and translated by Stephen Mercado. <https://digitalarchive.umd.edu/document/120018>

Summary:

Deng Xiaoping and Fukuda Takeo discuss Sino-Japanese relations, the Soviet Union, Vietnam, and Soviet-American negotiations over nuclear weapons.

Credits:

This document was made possible with support from MacArthur Foundation

Original Language:

Japanese

Contents:

Original Scan
Translation - English

秘密指定解除

01-935-1

福田総理・鄧副総理会談記録
(第一回目)

情報公開室	秘
無	期限
5 部の内 号	

昭和53年10月23日
中 国 課

10月23日総理官邸小食堂に於いて、午後3時30分から同5時25分まで1時間55分にわたり福田総理・鄧副総理第1回会談が行われたところ、同会談の記録次のとおり。(出席者; 日本側: 福田総理、園田外務大臣、安倍官房長官、佐藤大使、高島外務審議官、中江アジア局長、小和田総理秘書官、田島中国課長、

中国側: 鄧小平副総理、廖承志副委員長、黄華外交部部長、韓念龍外交部副部長、符浩大使、李力殷国务院弁公室副主任、沈平アジア司長、王晓雲アジア司副司長、高建中礼賓司副司長、丁民日本処処長、王效賢副処長(通訳)、孫平処員(記録))

記

福田総理: 人民大会堂と比べると、この官邸の部屋は非常に小さく感じるでしょう。

鄧副総理: 私は、こういうのが好きだ。余り大き過ぎると、かえって人間が物足りない感じがする。

パンダという煙草ですが如何ですか。(ポケットから熊猫印の煙草をとり出して総理に渡す)

福田総理: 謝謝(中国語で)

(鄧副総理は、園田外務大臣、安倍官房長官等に煙草を同じくすすめる)

鄧副総理: 私が主人役を務めてしまった。

福田総理: 日本の流儀に従い私の方から挨拶して構わないか。

鄧副総理: どうぞ。

-2-

福田総理： 鄧副総理閣下、廖承志中日友好協会会長、並びに黄華外交部長その他中国の有力な皆さんが揃って訪日し、また本日は、歴史的な世界にとっても重要な日中平和友好条約の批准書交換式が無事とり行われ、心から喜こんでいる。また皆様の御来日を心から歓迎し、感謝します。

日中両国は、二千年に亘る友好協力の歴史を持っているが、今世紀に至り、不幸な事件が続き、深く遺憾なことであつたと反省している。この反省の上に立ち再びこのようなことを繰り返してはならないと考えており、日本政府及び日本国民を代表して、これから永遠に名実ともに日中両国が善隣友好関係で行きたいと願っていることを会談の冒頭に申し上げる。

申し上げるまでもなく、戦前の日本は、軍国日本であり、小国ではあつたが、3大海軍国の一つであり5大陸軍国の一つであつた。不幸な戦争が終り、日本はその姿勢を改め、体制を完全に変えた。わが国は再び軍事国家とはならない決意をし、平和に徹する道を歩みその決意の上に営々として経済的に世界有数の力を貯えるに至り、経済上の大国となつた。

今日の日本経済の規模は、1930年代と比べると25倍に達している。例えば、軍事力に関係のある鉄の生産について言えば、1930年代には400万トンであつたが今は設備の面から言えば1億5,000万トン、実際の生産量は1億トンに達している。世界の歴史を顧りみると、経済的に力をつけた国家は必らず軍事大国となつている。しかしながら、わが国は再び軍事大国の道を選ばないことを決意した。戦後その姿勢を一貫して堅持しており、わが国の憲法にも、そのことが規定されている。貴国もこの点を理解して頂きたい。

私は今、わが国は強大な軍事力は持たないと述べたが、ではその中でわが国の安全を維持するためにどうするのか。それは先ず第一に世

界が平和でなければならない。世界が平和であるためには、わが国は軍事力でなく、その持てる経済力によつて世界の平和と安定のために努力するとの態度をとつている。

第二に、世界のいずれの国とも敵対関係を持たず、いずれの国とも仲よくすることである。

私は、これを全方位平和外交と呼んでいる。しかし全方位平和外交は、決して全方位等距離外交を意味しない。わが国と他の国との関係は、それぞれ環境も条件も異つている。従つてそれぞれの国との関係は等距離にはならない。わが国は、いずれの国に対しても敵対的な態度をとらないという方針を外交の基本にしている。

第三に、わが国は平和の姿勢を維持しているが、世界の国の中には間違つた考えや姿勢をとる国がないとは限らない。わが国として、もし、侵略があれば断固としてこれをはねつける。わが国は決して他国に脅威を与えないし、また侵略もしない。しかし、有りうべき侵略を断固としてはねのけるため、わが国は自衛力を持つ。それは専ら自衛のためのものであり、専守防衛を決意している。わが国は専守のため自衛力強化の努力をしているが、今後ともその努力を続けて行く。しかしながら、わが国は、この自衛力だけでは自国の安全を守りきれない。そのため、わが国は米国との間に安保条約を締結しており、万一の際は、日米が共同して防衛に当ることを考えている。

今私は、先般の条約交渉のため訪中した園田外務大臣が北京で申し上げたわが国外交の基本方針を繰り返し申し述べた。この、わが国外交の基本方針を、よく理解して頂きたい。さて、そういう中で日中間においては不幸な時代は比較的長かつたが、6年前に日中共同声明が出来て、国交が回復された。今回また先々に平和を保つ日中平和友好条約が締結され日中両国が将来にわたり友好的につき合つて行くための基礎ができた。日中両国が先々にわたり友好的関係を保つて行くこ

とは、アジアの平和ばかりでなく世界の平和にも貢献することになる。そのようにこの条約を運用したいと祈念している。

鄧小平閣下にお目にかかるのは今回初めてであるが、初めて会ったような感じがしない。年来の旧知のような感じがする。本日は、貴国の世界情勢に対する見解、アジア情勢に対する見解を承つたり、また私の方からも私の考え方を述べたりしたい。今朝(表敬訪問の際)申し上げたように浴衣がけでザックばらんに意見交換が出来れば幸いである。

鄧副総理： 先ず、私は、福田総理閣下、日本政府、並びに日本人民が、われわれ一行に与えて下さった心温まる歓待に対し衷心より感謝の意を表明する。

福田総理の只今の御話しの中で中日平和友好条約締結の意義について評価されたが、この評価に同感である。この条約は、その名称からして平和友好のための条約であり中日両国は、平和で友好的につき合つて行かねばならない。この条約の意義につき、福田総理が述べられたことに全く賛成である。この条約により中日両国が平和に友好的につき合つていくことは、アジア・太平洋地域の人民の間にとどまらず、広く世界人民の間の友好にとつても重要な意義を持つ。

中華人民共和国の建国以来、わが国と貴国は相当長い期間国交が正常化されなかつたが、われわれは終始一貫して中日両国間には二千年に亘る交流の歴史があると言つて来た。この間の不幸な何十年かは、歴史の流れの中の不幸な挿話にすぎない。1972年に中日両国は共同声明を發出し、国交の正常化を行つたが、この共同声明により両国間の不幸な期間は既に終止符が打たれたというべきである。

勿論、1972年に中日両国が国交を正常化する前にも両国間には民間の往来が多くあつた。特に日本からは、多くの友人が中国を訪問し、民間レベルでの往来は非常に発展した。国交正常化以降は政府レベル

でも中日間の交流は大きな発展をみせた。

この度、福田総理閣下の決断により、園田外務大臣が北京を訪れ、中日平和友好条約に調印し、この度それが発効したことは、中日間の過去について事実上も、法律的にも、政治的にも、総括をしたことになる。特に大事なことは、政治の面において中日両国友好関係を絶えず発展させることを決意したことである。われわれ両国の関係を発展させることは、単に中日両国人民のみではなく、アジア・太平洋地域諸国及び世界の人民の要求でもあると確信している。今回の訪問において私は、滞日中「中日両国は世々代代友好国関係を維持して行かねばならない」という言葉を繰り返して使いたいと思う。両国関係を発展させることは、権宜の計ではない。率直に言うと、中国は日本の友好を必要としているが、同様に日本にとつても中国との友好は必要なことであると考え。貴国にとつて中国は貧乏な隣人ではあるが、何かお役に立つことがあると思う。中国は、日本の国策を理解している。日本の国策は世界の総ての国と友好的につき合っていくということであるが、われわれも、貴国と同様世界のあらゆる国と仲よくしたいと考えている。例えば率直に申し上げると、ソ連との関係がしつくり行っていないが、われわれは、ソ連との関係がぎくしゃくしていても国家関係は正常なものに保ちたいと考えている。従つて、ソ連との関係を発展させたいと考えている国に、わが国から口を挿しはさむことは良くないことと考えている。われわれとして、それにとやかく言うべきではない。

福田総理は、只今、中国の国際情勢に関する見解を聞きたいと言われたが、中国側の見解は、福田総理もよく御存知だと思う。先般園田大臣が訪中された時にお話したので、それにつき園田大臣から報告があつたと思う。総じて言えば、中国は、他の国より世界情勢について憂慮している。世界情勢はそれ程安定していないと見ている。

第二次世界大戦が終了してから、人々はしきりにデタントを口に出している。もう34年間も「軍縮」とか「緊張緩和」を口にしてきた。しかしこの34年間でふり返ると本当の緊張緩和は一時としてみられなかったし、正真正銘の軍備縮少もみられなかった。ただ、軍縮については貴国だけがそれを本当にやった。しかし、貴国も自分の手中に自衛力を持たねばならなかった。率直に言つて、軍縮などは、中国にとつても世界の大多数の国にとつても、全く話にならないことだ。何故なら、この厳しい国際情勢に直面していながら、多くの国は自国を防衛する力も十分持てないでいる。特に二つの超大国は毎日々々「軍縮」や「緊張緩和」を唱えながら、他方、緊張を激化させ軍備を拡張し、戦争準備に拍車をかけている。このような状況の下では元々自衛力のない国は軍縮の話など口に出そうにも出せないことだ。

どのように見ても二つの超大国は毎日々々軍拡を行つている。米国のこの態度は衆目の見るところである。しかし、尚更注意を要するのは、もう一つの超大国であるソ連が、軍拡に力を入れ、戦争準備をしていることである。これにつき過去において日本の友人やヨーロッパ、米国の政治家と話をしたことがある。北京にやつて来る米国人は、米ソ間での軍縮交渉において、米国側は有利なとり引きが出来たと言つている。近々戦略兵器制限につき米ソ間で話しがまとまるようだが、われわれは、彼ら(米国人)の注意を促している。そのようなとり引きが、最終的にどちらにとり有利かどうか見る必要がある。

1974年にウラジオストック協定が出来た時、キッシンジャー博士は東京経由で北京にやつて来て、ウラジオストック協定の内容につき、中国に通報してくれた。「キ」博士は、この協定の意義を割合冷静に評価しており、その解釈も米国にとり有利なものであるということだつた。しかし、彼は、この協定は双方の今後の核開発の発展を拘束するものでないことを力説していた。

-7-

そこで私は「キ」博士の注意を促しておいた。米ソはこれまで三回に亘り戦略兵器の制限交渉を行ってきた。第1回目は、1963年に行われたもので、米、英、ソが中心となり締結した部分的核実験禁止条約である。この条約により、米ソは、互いの核兵器開発を拘束しようとするとともに、中国の核兵器開発を拘束しようとした。当時、米ソ間の核戦力の差はかなり大きかったが、結果的に言えばソ連はこの条約を十分に利用し非常な勢いで米国に追いつこうとした。

第2回目は、1972年の米ソ2カ国間の協定(SALT I)である。米国もソ連と同様非常な勢で核兵器の開発に努めたが、米国は、1972年の時点で、ソ連の核兵器の力が米国に接近して来たことを認めざるを得なかった。この協定が出来た時、これは人類の平和に貢献するものであると評価した。しかし結果的には、米ソは引続き軍拡を競い合うことになった。ソ連は特にそれを十分利用した。

それから2年たち、第3回目のウラジオストック協定が出来た。この協定交渉の際、米国は、米・ソの核戦力がほぼ同じになったと認めざるを得なかった。この協定が出来た時も人々は、これを非常によい成果であると評価したが、米国政府すらこの合意はソ連に対し何の拘束にもならないと認めていた。この合意の中で規定された核兵器の制限数は、当時の米ソの核保有量より多く、また、特に核兵器の質の面における制限に触れていなかった。質の問題は数の制限よりももっと重要なことである。キッシンジャー博士すらウラジオストック合意が米ソ双方にとり拘束にならないことを認めていたので、私は「キ」博士に対し冗談半分に、「どうぞソ連と競争を続けて下さい。」と言った。結果は、やはり競争になった。

今回は第4回目の協定(SALT II)が話し合われているが、核兵器の数量面では、上限が縮められたが、結果的には、また軍拡競争になるものと思う。

このように数年来、両超大国は軍備拡張を行ってきたが、私は、単に核兵器の拡張だけに目を向けるだけではなく、通常兵器にも関心を持つべきであると言っている。

毛主席はいつも「将来の戦争は核戦争になるであろうか」との問題を述べ、「核兵器というものは、敵方にも沢山有り、味方にも沢山有るという状態だと軽々に使えなくなってしまう」と述べた。戦争の目的は土地を占領し、人民を支配し財産を奪い、資源を掠奪することにある。従って核兵器により北京を破壊してしまつてから北京を占領しても、何の価値もない。核兵器がある以上核戦争が発生する可能性は有るが、通常兵器による戦争の可能性も大いに有ることを忘れてはならない。相当長い期間、米国もヨーロッパも通常兵器の整備、強化を軽視してきた。最近はやうやく通常兵器に注意を払うようになった。しかし現在のソ連の通常兵器保有量は、米国及びヨーロッパの保有量を総て合わせた総量を上回る。このような厳しい現実を目前にして、世界人民に「緊張緩和」を言つても、説得力を持たない。

ソ連は一生懸命核兵器を開発している以上、それをいつか使う気になる。核兵器は、煮ることも、食べることも、使うことも出来ない。倉庫の中に多く貯えられるようになれば、結果として、人々の意思でこれらの兵器を制御できなくなる。われわれは常にこのような厳しい現実に関心を向けるよう各国の友人、政治家に忠告している。戦争に対し、われわれは思想上の準備が必要である。戦争の危険性は常にわれわれの前に置かれていることを忘れてはならない。

しかし、これはどうにもならないということでもない。今日、われわれの間に締結された中日平和友好条約は、その名称の中に平和という文字が入っている。中国、日本及び世界の国々は総て平和を願っている。しかしソ連政府は別である。

国際情勢の発展を見ていると、予想が外れることがある。第1次大

戦にせよ第2次大戦にせよ、小さなことから戦争が発生している。気狂いがいつの日に気狂いになるかは予想できない。従つてそれに対し常に準備しておく必要がある。

中国は、常に表明しているように、平和を希求している。戦争は避けられない。しかし戦争は手段を尽して先に延ばしたいと考えている。戦争の発生を延ばす手段はあり、手を打つことが出来る。それは、世界の人民が警戒心を高めることである。つまり世界の人民が戦争を引き起こす国の戦略上の措置を打ち砕くことである。宥和主義をとつてはならない。宥和主義をとれば、戦争を引き起こそうとする人間がそれに留意することとなる。現在、世界戦争を引き起こそうとする者は戦略的配備を進めるため、基地を占領し、資源を獲得しようとしている。われわれは真向から彼らの戦略的配備を打ち砕く必要がある。

中国のソマリア、エチオピア及びザイールに対する態度について一部の人は理解できないかもしれないが、上述のような中国の世界についての観点から見れば理解して貰えると思う。

過去において中国は日米安保条約に反対しておきながら現在それに理解を示していることに対し、一部の人は理解できないと言っているが、これも上述の観点からみれば理解できるであろう。

中日両国の国交が正常化される以前にも毛主席は、日本の友人に対し日本にとり日米関係が第一であり、中日関係は第二であると述べていた。中国は過去において日本の軍国主義に反対しておきながら、現在、自衛隊の発展に賛成していることに対し、何故であるか理解できないと言っている人もある。しかしこれも上述の観点から理解できるだろう。

すなわち、それはわれわれが戦争を引き延ばし、平和な時代を長くするために有利であると考えているからであり、総てこのような世界

-10-

戦略の観点に立つての態度である。

中東の問題についても西欧、ラ米、アフリカの問題についても、われわれは世界的戦略の観点からわれわれの態度を決めている。

さて、中日両国双方は中日条約締結に熱心であつた。この条約は中日間の問題にとつてばかりでなく、アジア太平洋地域の問題の解決にとつても有利であると考え。世界的に有利である。われわれは、中日平和友好条約締結の意義を世界の平和にとり真に有利であると評価している。

現在、ソ連が、世界の各地域において今までより手をひっこめたという事実上の根拠はない。逆に今まで以上に手を長く伸ばしている。中東、北アフリカ、アフリカ全体等をみてもソ連が手を伸ばしていない地域はない。先般も、南イエメン及び北イエメンにおいて2人の大統領がソ連の手によつて殺された。その後、ソ連は両イエメンに対する支配を強めた。ソ連はキューバを利用して中東とアフリカに手を伸ばしている。これらの地域にキューバ兵は少なくとも5万人はいる。東方では、アフガニスタン事件やヴィエトナム問題がある。ソ連はこれからも手を出し続けるであろう。ソ連は隙さえあれば手を出し、軍を入れる。われわれは、かかる厳しい国際情勢に直面して真剣に対処しなければならない。

以上が世界情勢に対するわれわれの全般的な見方である。

福田総理： 全世界的観点から国際情勢について述べられた只今の鄧副総理閣下のお話に感銘を受けた。貴副総理閣下のお話は、世界の不安の要因は東西関係にあるということに尽きると考える。私も世界の不安を作っている要因は東西関係にあると考える。

先般NATOの中心である西独のシュミット首相と会談した際、私が鄧副総理が近く来日されるという話をしたら「是非よろしく伝えて欲しい」という伝言があつたので、先ず忘れぬうちにそれをお伝えす

る。

その会談の際、世界情勢につき意見交換を行つたが、そこでも、これからの世界情勢を展望する時、やはり東西関係に世界の緊張の原因があるということであつた。

西側諸国の大きな心配は、軍事的な問題以外に経済の問題がある。6年前の石油ショック以来世界中の諸国が大きな打撃を受けた。特に石油が出ない開発途上国に混乱をもたらした。これらの国はどのようにしたらいいか分からない状態に陥入り不安定な状態が続いた。このような国に対して先進国は援助しなければならないが、先進国自身、インフレと赤字をかかえ、更に米国のドルの価値が下落し、通貨不安が起つた。

かかる西側の経済的混乱を早く安定化させないと、政治的混乱を引き起こす結果になりかねない。そうならないよう日・米・欧の三者が、周恩来総理がかつて言われたように小異をすて大同につき、協力をしなければならない。これら日米欧は、互いに不満を言い合うのをやめ、一刻も早く経済を安定させねばならないことに意見の一致をみた。

わが国は、かかる認識に立ち、日米欧相い協力して、世界経済安定のため財政上苦しい中を犠牲を払い最善の努力を払っている。

なかんずく、わが国は、わが国周辺の東南アジア諸国の連帯と国家建設の自主的努力に対し、苦しい立場からも、最善の協力をしようとしている。

ヴェトナムから米軍が撤退した時、東南アジア諸国は、この地域にドミノ現象が起こるのではないかと心配したが、ASEAN諸国が立ち上り互いに協力し、自立しようとする姿勢を示した。その結果ドミノ現象は起こらず、われわれは、よかつたと思つている。

昨年私はASEAN諸国を中心に東南アジア諸国を歴訪したが、その

際これらの諸国の自主的努力を激励した。わが国は、軍事力ではなく経済力をもってこれらの国の自主的努力を積極的に助けたいと考えている。

東南アジア諸国は、いい動きを示しているが、われわれが唯一心配しているのは朝鮮半島の問題である。一つの民族が二つに分れて対立している。これは民族の非劇である。われわれは、できるだけ早く平和的に統一されることを念願している。實際上、早急に統一の実現を期待することは無理であろうが、朝鮮半島は日本にも近く、中国とも地続きであるから、平和統一のための環境がどうしたら出来るか、日中両国は協力してこのような環境作りに共に努力すべき立場にあると考える。

鄧副総理のお話を聞き、中国の世界平和を願う考え方を理解した。わが国も平和と友好を国是としている。これからは日中相携えて世界の平和に努力したい。しかし、日中両国は体制が異なり、立場の相違がある。従って平和に対する努力の態様が異なるかもしれないが、条約が締結された今日、世界の平和のために互いに協力していく決意をしたい。

鄧副総理： 只今、第三世界の問題、石油の問題について福田総理のお話を伺ったが、米国はこれらの問題解決に当り、対抗する方針をとったが、西欧や貴国は対話の方針をとった。私は、貴国や西欧がとった方針は正しいと思う。西欧や日本は巨大な経済力や技術力を持っている。このような力をもって数年間の間に失なったものを再び取り戻すことができると思う。

西欧や日本が貧しい国の経済的自立と政治的独立の努力に対し、いかなる形にせよ協力することを、中国は支持する。それは必要なことであると考えている。アジア特に東南アジアは歴史的背景もあり、どうしても日本に対し危惧の念を抱いている。私は、日本がこれらの諸国に

-13-

援助を与えれば、かかる危惧の念をなくすことが出来るものと思う。われわれは日本がこの方面においてより多くの仕事をされることを衷心より願う。

在席の皆さんの関心事はヴィエトナムの問題であろうと思う。この問題の歴史的な原因、問題の発展の要因、及び中国のこの問題に対する態度等について先般園田大臣とも話し合った。

率直に言つてヴィエトナム問題が進展して行くことには気がついていたが、かかる形で進展していかうとは予想していなかつた。われわれ自身も実際のところ何故ヴィエトナムが今のような態度をとるようになったのか不思議でよく理解できないところがある。

ヴィエトナムが抗仏、抗米を進めていた頃、われわれは全力を尽してヴィエトナムを援助した。必要なものは、食べる物から着るもの、武器まで総て援助した。中国自身豊かではなく、困難を抱えながらも援助した。ソ連は戦争の後期になり重兵器の援助を与えた。われわれの与えた援助は当時の価格で100億ドル、現在のドルの価値で換算すると200億ドルを上回る。当時ヴィエトナムは民族独立のために戦つており、われわれには国際主義の立場からヴィエトナムを援助する義務があつた。

ヴィエトナムは既に60年代から中国に対し友好的ではなかつた。例えば彼らの教科書の中でも歴史的にヴィエトナムは北から脅威を受けていたとして暗に中国を非難した。このようなヴィエトナムの態度はよくないとは思つていたが、引き続き援助を与えていた。

ヴィエトナムが何故ソ連一辺倒になつたかという、それはヴィエトナムがインドシナ連邦を作りたいと考えているからである。インドシナ連邦を作ることが、ここ数年来のヴィエトナムの念願であり、ラオスやカンボディアを統制しようとしている。その他の地域にも影響を及ぼそうとしている。ヴィエトナムはソ連の挑発により、中国がイ

-14-

ンドシナ連邦実現の最大の障害であると吹き込まれている。ソ連はヴェトナムに影響を与え続け、このためヴェトナムは一步一步ソ連に寝がえって行つた。

それから、ヴェトナムは南部を統一してから少し頭がのぼせているということもある。彼らは、米国、ソ連に次ぎ世界第三の軍事大国になつたと称している。これは一種の風刺でもある。

国内では反中国の宣伝が盛り上り、最後に華僑事件が起つた。大量の華僑を追い出した。

ヴェトナムは華僑問題につき両国間にあつた協定を裏切つてしまつた。強制的に国籍を変えさせ、華僑の存在を一切認めず、社会主義改造の名目で華僑の財産を没収してしまつた。

現在ヴェトナムは東方のキューバと呼ばれている。実際にもそうなつている。われわれはこのような情勢について真剣に考えた。現在ヴェトナムはカンボディアを侵攻しようとしている。その戦争の規模は抗米戦争、グエンバンチュウに対する戦争のそれよりも上回つている。このような状況の下では、中国の援助の意義は全くなくなつてしまつた。しかし、援助を停止する決意は、それ程容易なものではなかつた。われわれは、東方のキューバをこれ以上強大化したくなかつたので、援助を停止したが、そうすることによりかえつてヴェトナムをソ連の方へ追いやつてしまうのではないかとの心配も真剣に考慮した。しかし、検討の結果ヴェトナムは、とうの昔にソ連の基地になつてしまつているということが分つた。従つて、ソ連の方に追いやつてしまうという問題は既になかつた。米国の政治家と話した時も、ヴェトナムがソ連のために基地を作るという問題は存在しない、米国が既に基地を作つてしまつているからだと言つたことがある。残された問題は、これらの基地をソ連がいかに使用するかということである。ヴェトナムには立派な軍港、数十に上る空港ができており、更

に建設する必要はない。

われわれの見方はヴィエトナムという風呂敷包みをソ連に背負わせようというものである。ヴィエトナムは片方の手で中国から、もう一方の手でソ連から援助をとり続けていた。今後は、ヴィエトナムをソ連とだけ付き合わせればよい。そうすればヴィエトナムのソ連に対する考え方が変って来るであろう。エジプト、ソマリヤ、インドの例がある。これらの国は、ソ連とつき合った結果、ソ連に対する考え方が変ってしまった。

現在ヴィエトナムは大きな困難に遭遇している。中国は援助を停止してからヴィエトナムの態度を静観しているが、ソ連は困難を抱えたヴィエトナムという風呂敷包みを負えなくなつてきている。そのため、ソ連は、この負担を軽くするため二つの段どりをとった。第一に、ヴィエトナムをコメコンに参加させ、東欧諸国に負担を分散させることにした。第二に、その他の諸外国から援助をとりつけるようそのかしている。日本、米国、ヨーロッパを始め、比較的貧乏な東南アジアからもさえ援助を貰おうとしている。ソ連の指図がなければ、ヴィエトナムもそのようなことはしないであろう。

われわれは、われわれがかつて汲み取った教訓をヴィエトナムが一刻も早く汲みとるよう、ソ連と付き合いをさせればよいと考えている。ヴィエトナムは、自らの困難が多くなればなる程、教訓を早く汲みとるだろう。従つて、ヴィエトナムの困難を助けるため早く手を打つても仕方のないことである。

福田総理： お話を伺い大変参考になつた。友好的な対話は、われわれの相互理解を助けることになろう。今日はこれぐらいにしよう。朝鮮半島の問題は明後日にしよう。

(以上)

Record of Meeting between Prime Minister Fukuda and Vice Premier Deng
(First Meeting)

October 23, 1978
China Division

On 23 October, in the Small Dining Room of the Prime Minister's Official Residence, from 3:30 to 5:25 in the afternoon, for one hour and 55 minutes, there took place the first meeting between Prime Minister Fukuda and Vice Premier Deng. Following is a record of the meeting. (Participants; Japanese side: Prime Minister Fukuda, Foreign Minister Sonoda, Chief Cabinet Secretary Abe, Ambassador Sato, Deputy Vice-Minister for Foreign Affairs Takashima, Asian Affairs Bureau Director-General Nakae, Private Secretary to the Prime Minister Owada, China Division Director Tajima, [name blacked out]. Chinese side: Vice Premier Deng Xiaoping, [5th National People's Congress (NPC) Standing] Committee Vice Chairman Liao Chengzhi, Foreign Minister Huang Hua, Vice Foreign Minister Han Nianlong, Ambassador Fu Hao, State Council Deputy Secretary-General Li Liyin, Asian Affairs Department Director Shen Ping, Asian Affairs Department Deputy Director Wang Xiaoyun, Protocol Department Deputy Director Gao Jianzhong, Japan Affairs Department Director Ding Min, Deputy Director Wang Xiaoxian (interpreter), Sun Ping, official (recorder)

Record

Prime Minister Fukuda: Compared to the Great Hall of the People, this room of the Prime Minister's Official Residence must feel very small to you.

Vice Premier Deng: I like this kind of room. When excessively large, on the other hand, a person has a sense of dissatisfaction.

These are Panda cigarettes. Would you care for one? (Pulling a pack of Panda cigarettes from his pocket and passing it to the Prime Minister)

Prime Minister Fukuda: Thank you (in Chinese).

(In the same way, Vice Premier Deng offered cigarettes to Foreign Minister Sonoda, Chief Cabinet Secretary Abe, and others.)

Vice Premier Deng: I have served as the host.

Prime Minister Fukuda: Following Japanese custom, do you mind if I offer the opening remarks?

Vice Premier Deng: Please go ahead.

Prime Minister Fukuda: Vice Premier Deng, China-Japan Friendship Association President Liao Chengzhi, Foreign Minister Huang, and other prominent guests who have come together to visit Japan, I am truly happy that today's ratification and exchange ceremony for the Treaty of Peace and Friendship between Japan and China, which is both historic and of global importance, took place successfully. I also sincerely welcome everyone's coming to Japan and am grateful for it.

Japan and China have a history of friendship and cooperation extending across two thousand years but, in this century, there was a succession of unfortunate incidents.

On reflection, this was deeply regrettable. In reflecting on this, I am resolved that such acts must never be repeated. Representing the Government of Japan and the Japanese people, at the start of this meeting I wish for Japan and China to go forward, in name and in reality, henceforth and forever with good-neighborly and friendly relations.

It goes without saying that prewar Japan was a military country. Although a small country, Japan was one of the three major naval countries and one of the five major military countries. With the end of that unfortunate war, Japan altered its posture and completely changed its system. Having resolved that our country would not again become a military nation and determined to adhere to the path of peace, we have accumulated world-class economic strength and become an economic power.

The scale of the Japanese economy today has reached 25 times that of the 1930s. For example, speaking of steel production, which is related to military power, it was 4 million tons in the 1930s. Today, speaking in terms of plant capacity, it is 150 million tons, although actual volume has reached 100 million tons. When we review the history of the world, a nation that has acquired economic power has without fail become a military power. Nevertheless, we are resolved that our country will not again choose the path of military power. Since the war, we have consistently and firmly maintained this system, which is also stipulated by our country's constitution. I would like your country, too, to understand this point.

I have just said that our country does not have great military power. What, then, do we do to maintain our country's security? First, the world must be at peace. For the world to be at peace, our country has adopted a posture of working, not by military power but by our economic power, for the peace and stability of the world.

Second, we do not have hostile relations with any country in the world. We are on good terms with all countries.

I call this omnidirectional peace diplomacy. However, by no means does omnidirectional peace diplomacy mean an omnidirectional and equidistant diplomacy. In our relations with other countries, the various environments and conditions are different. Accordingly, it would not do for our relations with various countries to be equidistant. As the basis for our country's diplomacy, we do not take a hostile attitude against any country.

Third, our country maintains a system of peace, but it is not necessarily the case that there is no country in the world that is not mistaken in its thinking or system. If there were an invasion of our country, we would resolutely repel it. We will certainly not threaten other countries, nor will we invade them. However, in order to resolutely repel a likely invasion, our country has the power of self-defense. It is for our own self-defense. We are resolved for an exclusively defensive defense. Our country is working to strengthen its power of self-defense for the exclusive defense of our country, and henceforth as well we will continue these efforts. Even so, our country cannot protect its own security by the power of self-defense alone. Therefore, our country has concluded a security treaty with the United States with the thought that, in an emergency, Japan and the United States together would take up defense.

I have now reiterated the basic policy of our country's diplomacy, which Foreign Minister Sonoda stated in Beijing on his recent visit to China for negotiations on the treaty. I would like you to understand this, the basic policy of our country's diplomacy. Now, that unfortunate period between Japan and China was relatively long, but six years ago the Japan-China Joint Communiqué was issued and relations were restored. This time, the Treaty of Peace and Friendship between Japan and China to protect the peace into the distant future has been concluded and the foundation has been laid for Japan and China to have relations into the future. Japan

and China keeping friendly relations into the distant future will contribute to peace not only in Asia but to world peace. I hope to use this treaty that way.

This is the first time for me to meet Your Excellency Deng Xiaoping, but I do not feel like this is our first meeting. I feel like we have known each other for many years. Today I would like to hear your country's view regarding the world situation and the situation in Asia. In addition, I would like to state for my part my thinking. As I said this morning (at the time of the courtesy call), it would be good if we are able to comfortably exchange opinions.

Vice Premier Deng: First, I sincerely express appreciation for the warm welcome that Your Excellency Prime Minister Fukuda, the Government of Japan, and the Japanese people have extended to us.

Prime Minister Fukuda, you spoke just now in appreciation regarding the meaning of the China-Japan Treaty of Peace and Friendship's conclusion. I feel the same way in appreciating it. This treaty, as written in its name, is a treaty for peace and friendship. China and Japan must go forward in relations of peace and friendship. As to the meaning of this treaty, I entirely agree with what you said, Prime Minister Fukuda. China and Japan's going forward in relations of peace and friendship has an important meaning not only for friendship among the people of the Asia-Pacific region, but broadly for friendship among the people of the world.

From the founding of the People's Republic of China, relations between our country and your country were not normalized for a considerably long period, but from the start we have always said that between China and Japan is a history extending for two thousand years. In this period, those unfortunate few dozen years are no more than an unfortunate episode within the flow of history. In 1972, China and Japan issued a joint statement and carried out a normalization of relations. With this joint statement, it should be said that an end was made to the unfortunate period between our two countries.

Of course, even before relations between China and Japan were normalized in 1972, there were many non-governmental contacts between our two countries. Particularly from Japan there came many friends to visit China, and contacts on the non-governmental level developed greatly. Relations since normalization have seen on the government level, too, a great development in exchanges between China and Japan.

By your determination, Your Excellency Prime Minister Fukuda, Foreign Minister Sonoda visited Beijing and signed the China-Japan Treaty of Peace and Friendship. It has now come into effect. This is a summary, effectively, legally, and politically, regarding the past between China and Japan. In particular, the important thing is that we have resolved to develop friendly relations ceaselessly between China and Japan in their political aspect. I firmly believe that developing relations between our two countries is not only the demand of the people of China and Japan but that of the people of the Asia-Pacific region's countries and of the world. In this visit, while staying in Japan, I have repeatedly wished to say that, "China and Japan should maintain friendly relations." Developing relations between our two countries is not a measure of expediency. Frankly speaking, I think that China needs Japan's friendship and, similarly, Japan also needs China's friendship. I think that, for your country, China is a poor neighbor but a useful one. China understands Japan's national policy. Maintaining friendly relations with all the countries in the world is Japan's national policy. We, too, as it is with your country, wish to be on good terms with each and every country in the world. For example, to put it frankly, relations with the Soviet Union are not going smoothly, but we would like to keep normal state-to-state relations, even if those with the Soviet Union are rough. Accordingly, we think that it would not be good for our country to intervene with remarks with a country wishing

to develop relations with the Soviet Union. We should not say this or that in regard to that.

Prime Minister Fukuda, you said just now that you would like to hear China's view on the international situation. I think, Prime Minister Fukuda, that you are well aware of the Chinese side's view. I recently spoke of it with Minister Sonoda when he visited China, so I think that there was a report to you from Minister Sonoda on it. Generally speaking, China is more concerned than other countries in regard to the world situation. We see the world situation as not so stable.

Since the Second World War came to an end, people have been repeatedly talking about détente. For 34 years now, they have gone on about "arms reduction," "détente," and such. However, having repeatedly talked about it for 34 years, a period of a true relaxation of tensions or a real reduction in arms has never been seen. Only in arms reduction, your country alone has been the only one to have really done it. However, even your country has had to hold in its hands the power of self-defense. Frankly speaking, arms reduction and such are completely out of the question for China and for the great majority of countries in the world. The reason is that, in the face of this harsh international situation, many countries lack sufficient power to defend themselves. In particular, while calling each and every day for "arms reduction" and "détente," the two superpowers on the other hand worsen tensions, expand their armaments, and hasten preparations for war. Under such circumstance, naturally, a country without the power of self-defense has nothing it can say about arms reduction.

No matter how one looks at it, the two superpowers are engaged each and every day in arms expansion. Everyone can see the attitude of the United States on this. However, what requires still more attention is that the Soviet Union, the other superpower, is putting effort in expanding its armaments and making preparations for war. I have spoken in the past in regard to this with Japanese friends and with statesmen in Europe and the United States. I have been telling Americans coming to Beijing that, in the arms reduction negotiations between the United States and the Soviet Union, the US side has obtained a favorable deal. It seems that talks between the United States and the Soviet Union on strategic weapons limitations will soon be concluded. We have been urging them (the Americans) to take heed. It is necessary to see to which side the deal will ultimately prove beneficial.

When the Vladivostok agreements were reached in 1974, Dr. Kissinger via Tokyo came to Beijing and reported to China on the substance of the Vladivostok agreements. Dr. Kissinger gave a relatively cool appraisal of the meaning of this agreement, interpreting it as beneficial to the United States. However, he was emphatic that this agreement in no way restrained the two sides from future development of nuclear weapons.

At that point I urged Dr. Kissinger to take heed. The United States and the Soviet Union have to this point conducted Strategic Arms Limitation Talks (SALT) three times. The first time, the talks took place in 1963. The United States, Britain, and the Soviet Union, at the center of the talks, concluded the Partial Nuclear Test-Ban Treaty. With this treaty, the United States and the Soviet Union sought both to restrain each other's development of nuclear weapons and to restrain China's development of nuclear weapons. At that time, there was a considerably large gap between the nuclear forces of the United States and those of the Soviet Union. Consequently, the Soviet Union has been making full use of this treaty to attempt with considerable energy to overtake the United States.

The second time was the 1972 bilateral agreement between the United States and the Soviet Union (SALT I). The United States, in the same way as the Soviet Union, was working with considerable energy to develop nuclear weapons, but the United

States had to recognize that in 1972 the power of the Soviet Union's nuclear weapons had neared that of the United States. At the time that this agreement was reached, it was appraised as something contributing to the peace of mankind. Consequently, however, the United States and the Soviet Union have continued to compete in an arms race. The Soviet Union has made particular use of it.

Two years after that, the third round of talks resulted in the Vladivostok agreements. At the time of the negotiations over these agreements, the United States had to recognize that the nuclear forces of the United States and the Soviet Union were nearly equal. Even at the time that these agreements were concluded, people praised the result as very good, but even the US government admitted that these agreements in no way restrained the Soviet Union. The limit to the number of nuclear weapons stipulated in these agreements was greater than the amount of nuclear weapons held at the time by the United States and the Soviet Union. In particular, there also was no reference to restrictions on the quality of nuclear weapons. The problem of quality is more important than that of the restriction on numbers. As even Dr. Kissinger admitted that the Vladivostok agreements were no restraint on the United States and the Soviet Union, I said to him half-jokingly, "Please continue competing with the Soviet Union." The result, not surprisingly, was competition.

This time, talks are ongoing for the fourth agreement (SALT II). An upper limit has been reduced for the quantity of nuclear weapons, but I think the result will again be an arms race.

In this way, for several years now both superpowers have engaged in an arms buildup, each saying that it must not look only to the buildup of nuclear weapons but must pay attention as well to conventional weapons.

Mao Zedong always spoke of the problem of "whether war in the future would be fought with nuclear weapons," saying that "in a situation in which both enemies and allies have many nuclear weapons, the result is that they can no longer be used lightly." Objectives in war are to occupy territory, dominate the people, seize property, and plunder resources. Accordingly, there is no value in occupying Beijing after destroying the city with nuclear weapons. So long as there are nuclear weapons, there exists the possibility of nuclear war taking place, but we should not forget that there is also a great possibility of war by conventional weapons. For a fairly long period of time, both the United States and Europe neglected the upkeep and strengthening of conventional weapons. Recently, they have finally come to pay attention to conventional weapons. However, the quantity of conventional weapons that the Soviet Union has is more than the total amount of the United States and Europe combined. Faced with such harsh reality, even if you speak to the people of the world of "détente," it has no power of persuasion.

As the Soviet Union is working with all its might to develop nuclear weapons, the concern is that it will someday use them. One cannot boil, eat or use nuclear weapons. If many of them are stockpiled, the result is that people lose the ability to control these weapons as they intend. We have always warned friends and statesmen of every country to face this harsh reality. We need to be mentally prepared for war. We should never forget that the danger of war is before our eyes.

However, it is not that we are helpless. In the name of the China-Japan Treaty of Peace and Friendship, which we concluded today, is the word "peace." China, Japan, and all the world's countries wish for peace. However, the Soviet government is a different matter.

Regarding developments in the international situation, our expectations have been off the mark. In the cases of both the First World War and the Second World War, small things led to war's outbreak. One cannot predict the day when a maniac goes

crazy. Accordingly, there is always a need to prepare for that.

China, as I have always stated, hopes for peace. War is unavoidable. However, we would like to put off war in using all means available. There is a means to postpone the outbreak of war, and it possible to take that means. That would be to heighten the vigilance of the people of the world. That is to say, the people of the world would smash the strategy of the country that would cause war. We should not choose appeasement. If we choose appeasement, those who are seeking to cause war will set their mind on it. At present, those seeking to cause world war are attempting to occupy bases and secure resources in order to advance strategic deployment. We need to face and smash their strategic deployment.

Some people may not understand China's attitude towards Somalia, Ethiopia and Zaire but I think that, looking at it from China's view of the world, which I just gave, we can have them understand it.

Some people say that they cannot understand how China, which in the past opposed the US-Japan security treaty, now expresses understanding for it, but I think that they can understand it from the viewpoint I just mentioned.

Even before relations between China and Japan were normalized, Chairman Mao said to Japanese friends that, for Japan, relations between Japan and the United States came first and those between China and Japan came second. Some people say that they cannot understand why China, while in the past opposing Japan's militarism, at present approves of the development of the Self-Defense Forces. However, I think that they can understand that as well from the viewpoint I just mentioned.

That is to say, it is because we think it is beneficial to postpone war and prolong the era of peace. It is all an attitude based on such a global strategic viewpoint.

Regarding the problem of the Middle East, as well as those of Western Europe, Latin America, and Africa, we determine our attitude from a global strategic viewpoint.

Now, both China and Japan were enthusiastic about concluding a Sino-Japanese treaty. I think that this treaty is beneficial not only in regard to the resolution of issues between China and Japan, but to that of issues in the Asia-Pacific region as well. I see it as truly beneficial to peace in the world.

At present, there is no basis in fact to a Soviet withdrawal from various regions of the world. On the contrary, the Soviets are extending their reach even farther than it has been until now. Whether we look at the Middle East, North Africa, all of Africa or elsewhere, there is no region where the Soviet Union is not extending their reach. Even recently, in South Yemen and North Yemen the two presidents were killed by the Soviets. Thereafter, the Soviet Union strengthened its domination over the two Yemens. The Soviet Union is making use of Cuba to extend its reach in the Middle East and Africa. There are at least 50,000 Cuban troops in these regions. In the East are the Afghanistan Incident and the Vietnam problem. I think that the Soviet Union will from now as well continue to extend its reach. If there is so much as a gap, the Soviet Union will extend its reach and send in troops. Faced with this harsh international situation, we should handle it seriously.

This is our general outlook on the world situation.

Prime Minister Fukuda: The remarks that Your Excellency Vice Premier Deng has just made regarding the international situation from a global viewpoint have made a great impression on me. What Your Excellency the Vice Premier is saying is that you think

that the primary factor in the world's instability lies in East-West relations. I also think that the primary factor creating instability in the world lies in East-West relations.

When I was speaking recently with Chancellor Schmidt of West Germany, which is the center of NATO, the moment I told him that Vice Premier Deng would soon be coming to Japan, he told me, "By all means, please convey my regards to him." So, I am conveying them before I forget.

At the time of that meeting, we exchanged opinions on the world situation. There, too, when looking out on the world situation from now, we said that the major factor in global tensions lies in East-West relations.

The major concern of the countries of the West, other than the military problem, is the economic one. Countries around the world have suffered greatly since the oil shock of six years ago. In particular, it has brought turmoil to developing countries without their own oil. These countries have fallen into a situation of not knowing what to do, and unstable conditions have continued there. The advanced countries should aid such countries, but the advanced countries themselves are beset with inflation and deficits. Furthermore, the value of the US dollar has fallen and there has been currency instability.

If we do not quickly stabilize such economic turmoil in the West, it would likely cause political turmoil. In order for that not to happen, Japan, the United States and Europe should, as Premier Zhou Enlai used to say, seek common ground while putting aside differences. Japan, the United States and Europe have come to a common view that we have to stop finding fault with one another and stabilize the economy as quickly as possible.

Our country, on the basis of this understanding and through cooperation among Japan, the United States and Europe, is making sacrifices amidst material difficulties and doing its best for the sake of global economic stability.

In particular, our country is doing its best to cooperate, even from a difficult position, in regard to the solidarity and independent efforts at nation-building of our neighboring countries in Southeast Asia.

When the United States withdrew from Vietnam, South East Asian countries were worried about a domino phenomenon taking place in this region, but the ASEAN countries showed a posture of making efforts to rise, cooperate among themselves, and stand on their own. The result was that a domino phenomenon did not take place. We are relieved at that.

Last year, I visited countries in Southeast Asia, with ASEAN countries at the center. At that time, I encouraged the efforts of those countries to stand on their own. Our country, possessing not military power but economic power, wishes to actively help these countries to stand on their own.

South East Asian countries are showing good movement. The only thing that worries us is the problem of the Korean Peninsula. A single people are divided in two and stand in opposition each side to the other. This is a tragedy for the Korean people. We sincerely hope for their peaceful unification as soon as possible. In reality, it is probably unreasonable to expect unification to be realized quickly but, as the Korean Peninsula is close to Japan and also borders China, I think that we are in a position where Japan and China should cooperate and make efforts together to create an environment for the achievement of peaceful unification.

Hearing Vice Premier Deng's talk, I understood China's way of thinking in its desire for world peace. Our country, too, fixes peace and friendship as its line of national policy. I would like henceforth for Japan and China to work together hand in hand for peace in the world. However, Japan and China have different systems and different positions. Accordingly, our attitudes on cooperating for peace may differ but today, having concluded the treaty, I would like to resolve to cooperate with one another for the sake of world peace.

Vice Premier Deng: I have just now heard your talk, Prime Minister Fukuda, on the problems of the Third World and of oil. The United States has chosen a policy of confrontation to resolve these problems, but Western Europe and your country have chosen one of dialogue. I think that the policy that your country and Western Europe have chosen is correct. Western Europe and Japan have enormous economic power. I think that, having such power, you can recover in several years what has been lost.

China supports Western Europe and Japan in their cooperating, in whatever form, with regard to the efforts of poor countries for economic and political independence. I think that is necessary. Asia, particularly Southeast Asia, given the history in the background, inevitably has misgivings about Japan. I think that, if Japan gives these countries aid, it will be possible to dispel these misgivings. We sincerely hope that Japan will do more work in this direction.

I think that what likely interests everyone here today is the problem of Vietnam. I recently discussed with Minister Sonoda this problem's historic origins, the primary factor in its development, China's attitude towards this problem, and such.

Frankly speaking, we were aware of the Vietnam problem's development but did not foresee it developing in this way. We ourselves find mysterious and do not really understand why Vietnam has chosen their present attitude.

At the time that Vietnam was engaged in resisting France and resisting the United States, we did everything that we could to aid Vietnam. We gave help in everything that was needed, from food and clothing to weapons. China itself was not wealthy. We gave aid while experiencing difficulties. Late in the war, the Soviet Union gave heavy weapons in aid. The value of the aid that we gave at the time was 10 billion dollars. Calculated at the dollar's present value, it would be over 20 billion dollars. At that time Vietnam was fighting for national liberation. From the standpoint of internationalism, it was our duty to aid Vietnam.

From the 1960s, Vietnam was already unfriendly towards China. For example, in their textbooks it was written that Vietnam historically was threatened from the north, implicitly criticizing China. We thought that such an attitude on the part of Vietnam was not good, but we continued giving aid.

The reason why Vietnam became completely pro-Soviet is that Vietnam wants to form an Indochina Federation. Establishing an Indochina Federation has been Vietnam's heartfelt desire these past few years. Vietnam has been attempting to control Laos and Cambodia as well as to extend its influence to other areas. Vietnam, stirred up by the Soviet Union, has been given the idea that China is the obstacle to the realization of an Indochina Federation. The Soviet Union continues to exert influence on Vietnam, and thus Vietnam went step by step over to the Soviet side.

Since then, after reuniting the South, Vietnam seems to have grown a bit conceited. They have been saying that they have become, after the United States and the Soviet Union, the world's third military power. It is a bit ironic.

Within Vietnam, anti-Chinese propaganda has risen to great heights and incidents

involving the overseas Chinese there have ultimately taken place. They have expelled a great many overseas Chinese.

Vietnam betrayed our bilateral agreement on the overseas Chinese problem. They have forced them to change their nationality, have not at all recognized their existence as overseas Chinese, and confiscated property from overseas Chinese in the name of socialist reform.

Vietnam is now called the Cuba of the East. In fact, that is what it has become. We have given the situation serious thought. At present, Vietnam is invading Cambodia. The scale of that war has gone beyond their war of resistance against the United States and the one waged against Nguyen Van Thieu. Under such circumstances, China's aid became completely meaningless. However, it was no easy thing to resolve to halt the aid. We halted the aid because we did not want the Cuba of the East to grow any more powerful. We did seriously consider the concern that, in so doing, we may on the other hand drive Vietnam over to the Soviet side. However, having examined the issue, we realized that Vietnam had long ago become a base for the Soviet Union. Accordingly, the problem of driving them to the Soviet side had already ceased to exist. When we spoke with US statesmen, too, we said that the problem of Vietnam building bases for the Soviet Union did not exist, because the United States had already built them. The problem that remains is how the Soviet Union will use these bases. In Vietnam an excellent military port and dozens of airports have been built. There is no need to construct more of them.

Our view is one of making the Soviet Union bear the burden of Vietnam on its back. Vietnam was continuously taking aid from China with one hand while taking it from the Soviet Union with the other one. Let Vietnam from now on associate only with the Soviet Union. Then Vietnam's thinking in regard to the Soviet Union will likely change. Egypt, Somalia, India are examples of that. These countries, as the result of associating with the Soviet Union, changed their thinking in regard to the Soviet Union.

At present Vietnam is encountering major difficulties. China has been calmly watching Vietnam's attitude since the aid halt. The Soviet Union has had to bear the burden of a Vietnam in difficulty. The Soviet Union thus has made two arrangements to lighten its load. First, it has made Vietnam join COMECON and spread the burden among the countries of Eastern Europe. Second, it has incited Vietnam to seek aid from other foreign countries. Vietnam is trying to receive aid from not only Japan, the United States, and Europe, but even from relatively poor Southeast Asia. If not for the Soviet Union's directions, even Vietnam would probably not do such things.

We think it fine to have Vietnam associate with the Soviet Union in order to grasp as soon as possible the lesson that we once learned. The more numerous Vietnam's difficulties become, the more quickly that country is likely to learn its lesson. Accordingly, even if one were to move quickly to help Vietnam in its problems, it would be no use.

Prime Minister Fukuda: It has been very helpful for me to hear your talk. I believe that friendly dialogue will aid us in understanding one another. Let us stop here today. Let us discuss the problem of the Korean Peninsula the day after tomorrow.

End